



The Royal Photographic Society

Patron: Her Majesty The Queen. Incorporated by Royal Charter

NEWS LETTER 第 18 号 2010/10/25

発行所 英 国王立写真協会、日本支部

〒 107-0051

東京都港区元赤坂 1-7-10

元赤坂ビル 9F

Tel 03-5413-7829

Fax 03-5413-7410

E-mail : yoshi-rpsj@hotmail.co.jp

発行人 豊田芳州 編集人 川村賢一

<http://www.rps-japan.org>



第 8 回日本支部写真展開催

テ-マ : 「 the New Horizon(新たな展望)」

2010年2月11日(木) - 16日(火)の日程で、フォトエントランス日比谷にて第8回支部展を開催。

今年は、前年の林会員の第152回国際写真展スポンサー部門賞受賞を受け、そのテーマとなった「the New Horizon(新たな展望)」を支部写真展のテーマとして取り組むことになった。

このテーマで集まった作品は、多様で多岐にわたった。

豊田理事長を中心に、会員有志によって写真展の構成が検討され、3つのカテゴリーに分けて展示することとなった。

可能性への挑戦 Challenge to Possibility

宿命の開発 Fated Development

精神の創生 Mental Creation

難しいテーマと取り組み、明確なテーマ設定と、カテゴリー別展示構成により、一般のグループ写真展とはひと味違う、写真の奥深さと広がりを感じさせる写真展となった。ただ、一般来場者の期待との多少のズレや、課題も明らかになった。来場者数は、天候不順にも関わらずほぼ例年通りの300

名程度で、日英協会その他の広報もあり、他団体からの来場者や、英国人男性と日本人女性のカップルも多く見られた。

オープニングパーティも、近くのピアホールにて、ゲスト参加者とともに盛会のうちに終了した。

(展示作品の一部は、会員向けブログ「フレッシュRPS」の速報にてご覧いただけます。またさらに、支部HPにも掲載予定です。)



第2回 リレートーク研修会

2009年12月17日、東京代官山「花壇」にて、リレートーク第2回研修会(担当:川村会員)を開催する。

あいにくの寒い日で、年末のあわただしい時期でもあり、参加者は少なかったが、建築設計と建築写真の実務経験に基づいた独自のトークを展開する。

『写真とパースペクティブ』



川村 賢 ARPS

今回は、建築設計の専門学校で、長年培ってきたユニークな講座「写真とパースペクティブ」からRPS会員向けにまとめたトークで、パース原論を中心とした話だ。

写真においても、パースペクティブという言葉はよく目にするが、写真とパースペクティブの関係については、実際にはよく分からないと感じる人が多いと思う。

私自身、駆け出しの頃から、建築設計、設計パースと建築写真に、深く関わってきたが、それらの関係を正確に理解できたのは、20年以上もたってからだ。

「パースとは何か」

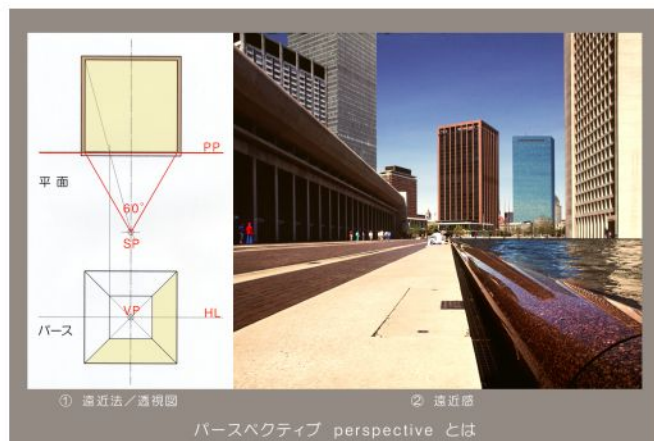
まず、「パースとは何か」を紹介する。

パースペクティブ (perspective) には、遠近法(透視図)と、遠近感(奥行き感)の2つの意味があり、一般にパースと呼ばれることが多いが、和製略語だ。

一般の写真では、遠近感を意味することが多いと思うが、建築業界では、遠近法(透視図)を一般に「パース」と呼んでいる。

建築をはじめとする立体の設計者にとって、パースは、大変有効で重要なツールである。

パース (perspective drawing) とは、3次元の立体空間をいかに2次元の平面上に表現するかという立体図法のひとつで、写真は、幾何学的原理において、遠近法と全く同じである。



「遠近法/透視図」と「遠近感」

「遠近法の歴史的意味」

次に、遠近法を切り口として、美術史の大きな流れを紹介する。

いわゆる遠近法(透視図)は、ルネサンス期に、多くの画家や図学者によって研究され、遠近法による写実的絵画表現が確立された。

「写真とカメラどちらが先か？」

遠近法とともに、光学的な研究も進み、それらの産物として、「カメラ オプスクーラ」と呼ばれる暗室空間装置/遠近法スケッチ用具が考案され、多くの画家に愛用された。

この基本構造は一眼レフカメラとほとんど同じで、この「カメラ」が今日の写真機の語源となった。

しかし、実際に写真が発明されるのは遙か200年後のことだ。

18世紀半ば、日本にも遠近法が伝わり、日本と西洋の美術史に大きく関わるが、19世紀前半、ついに写真が発明され、急速な発展を遂げる。

写真が発明されたことで、遠近法による写実的表現から、より自由な表現を求め、印象派の出現、さらには20世紀のモダンアート運動へと大きく発展する。

この間、遠近法はさらに実用化され、近代以降の建築設計プロセスで重要なツールとなった。

「写真と遠近法の空間原理」

続いて、建築写真と遠近法の密接な関係について紹介する。

遠近法では、3次元空間のXYZ3本の軸線の消点の数で、1点パース、2点パース、3点パースの3つがある。

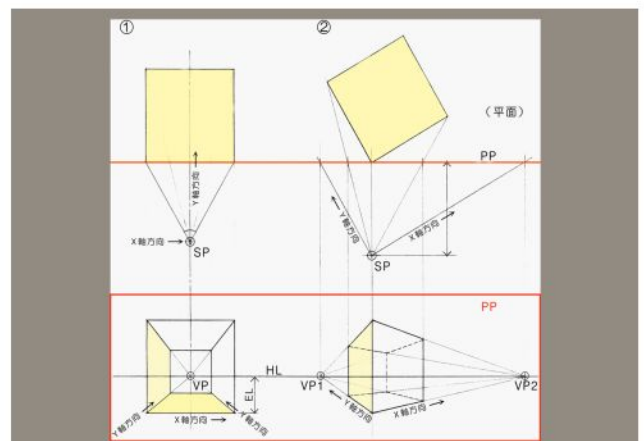
建築写真では、5つのポイントとして、「質感」「量感」「安定感」「立体感」「色彩感」が上げられているが、この中では重力軸との関係をきちっと表現する「安定感」が極めて重要であり、これが線の遠近法を重視する所以でもある。

パースの基本は、1点パースであり、室内、外観ともにもっとも多用される。

対象を少し斜めの立ち位置から見る2点パースは、立体的な表現で、外観パースの約半分は2点パースだ。

また、しばしば見上げたり、見下げたりしたい場合があるが、その場合は、X軸方向を平行のまま真っ直ぐ見上げる縦(見上げ)2点パースや、真っ直ぐ見下げる縦(見下げ)2点パースを使うことが望ましい。

3点パースは、どうしても他に表現できない場合に限る。3点パースの難しさは、鉛直線(重力軸)をどこに設定するかであり、何を表現したいかで変わってくる。



1点パースと2点パース



2 点パ - ス例(F Lライト設計の住宅、シカゴ郊外)

「遠近感とは？」

最後に、「遠近感とは？」 / 遠近感の違いはどこから来るのかについて紹介する。

同じ空間を、広角レンズで撮影した写真と、望遠レンズで撮影した写真で遠近感の違いを見ると、広角レンズで被写体に近づくほど、遠近感が強調され、望遠レンズで被写体から離れるほど遠近感は圧縮されることが分かる。

ここで重要なのは、「遠近感とは、対象空間と立点(撮影ポイント)との距離によって決まる」ということだ。

望遠レンズで圧縮効果が出るのは、遠くの奥行きが圧縮された部分を望遠鏡で拡大視しているということに他ならない。

したがって、同じ場所で撮影した場合は、広角であろうが、望遠であろうが、両者に共通する範囲内であれば、遠近感に変わりはない。



左:「近づいて広角撮影」 右:「離れて望遠撮影」
「遠近感とは、対象空間との距離によって決まる」

建築写真のように、実際の空間イメージを重視する場合は、自然な遠近感表現が重要で、過度のデフォルメは正しいスケール感の妨げとなる。

「一般写真の空間表現」

さらに、補足説明をいくつか紹介する。

「線の遠近法」とは別に、古典的な遠近表現に「空気遠近法」があり、今日でも大変有効な手法の1つだ。

写真特有の遠近感表現として、被写界深度やボケ味による遠近感表現があるが、これも空気遠近法の1種と考えられる。

また、「表現写真」の場合は、不安感や驚きなどの感情表現など、何を表現したいかによっては、あえて空間を傾けたり、歪ませる表現も手法としてよく使われる。

「写真とパースペクティブ」は目下のところ私の大きなテーマのひとつであり、さらに深めていきたい。

第3回 リレ - ト - ク研修会

2010年3月26日、東京六本木の「霞会館」にて、リレ - ト - ク第3回研修会(担当:高木会員)を開催する。

今回は、体制が大きく変わる以前のRPSについて、事情を知る唯一の会員である高木会員から大変興味深い話を伺う。

『英 国王立写真協会と私』



高木 祥光

「RPSとの出合」

1964年、当時私は日経新聞(日本橋兜町の業界紙から一般紙に移行)に勤めていたが、3回ほど入選した雑誌「カメラ毎日」の二村次郎編集長よりお誘いを受け、そこでRPS / 英国王立写真協会の存在を紹介される。

早速、ロンドンの特派員にRPSについて調べてもらった結果、RPSは、第2次大戦終了まで英国にいろいろあったロイヤルロビーのひとつであることが分かった。

ロイヤルロビーとは、産業の振興などを計るため、英国王室が全面的に支援する組織で、スノードン郷(エリザベス女王の一番下の弟)もメンバーで、入会するといろいろとメリットがありそうということだった。

「RPS 入会審査へチャレンジ」

入会するには、年一回の写真審査に「組写真」を送って、合格しなければならない。

なぜ「組写真」かと聞くと、「一枚撮りの写真は、偶然でも撮れるが、組写真となるとしっかりしたテーマで、一定の技術を持った人でなければ撮れない。」ということで、「15枚組の写真を求めている。」という説明を受けた。

そこで、二村編集長のアドバイスを受けて、チャレンジすることに。

テーマの選択には、日本の伝統行事、仏像、アイヌ、日本女性、等々いくつかの候補があったが、その中から一番身近な「日本女性」をテーマに決める。

たまたま友人の結婚式で行った上野精養軒で、イメージにぴったりの日本女性と出会った。マネジャーに伺うと、彼女は、作家幸田文さんの姪の幸田マリ子さんで、社会の見習い修行中とのこと。お母様にもお会いして、ようやく承諾を受け、モデルをお願いすることになった。

日本的ロケ地として、箱根旧道を選び、梅雨の季節に和服、和傘、高下駄等々を使って約一週間にわたって撮影する。

200カット以上の作品を二村編集長に見ていただき、7月頃15点の組写真をRPS本部へ送った。

10月頃、現在作品審査中、という連絡があったが、ロンドンの特派員から、案外は許されないという話しがる。

ほとんどあきらめかけていたクリスマスの直前、入会を許可するという知らせが届いた。戦後2番目の会員だった。



「当時の R P S 実像」

早速会費を納入すると、大きな箱が送られてきた。中を開けると、木製の盾、バッジ、ネクタイ、セーター等々の R P S 関連グッズだった。

車につけるエンブレムもあり、当時これをつけていると、パッキンガム宮殿にも門番が敬礼して入れてくれたとか。

グッズには、王冠のマークがあり、その大きさから、数ある王立協会の中でも、R P S は比較的上位にランクされていたらしい。

(これらは今では手に入らない歴史的価値のあるものばかりで、一同羨望のまなざしで拝見。)

「会員証はイギリス圏で活躍するときに大きな力を発揮するだろう」という添え書きがあり、いろいろ会則や行事の予定がたくさん送られてきた。

また、ほぼ毎月のように撮影会や勉強会(例えばケネス・ペーケンのヨット写真の撮り方)等々の活動案内や、様々な有名人を招いてのパーティや会食、ダンスパーティへの招待等々、社交面の案内も送られてくる。

中には、白い手袋を持参することや、馬車で来る時の注意書きもあり、写真協会なのか社交の会なのか分からないような感じだった。

「R P S 王室お抱えからの独立」

1970年頃、R P S 本部民営化の話が浮上する。

エリザベス女王の名はパトロンとして残るが、経営の実体は王室のお抱えから離れ、協会が独立した団体として活動することになった。

本部は、ロンドンのプリンセス通り24番地から2~3カ所移転したあと、現在のパー스에移転した。

(編集後記)

お詫び ニュースレターの発行が6ヶ月も滞ったこと、まずお詫び申し上げます。母の介護に振り回され、なかなか予定が立てられませんでした。

支部の活動も次第に活発になり、支部写真展も、R P S らしいよりテーマ性のある展示となり、一年前にスタートしたリレートークも軌道に乗り始めています。他では聞くことのできない興味深い話が今後も続きます。こうご期待です。(川村)



上左: バッジ、上右: 盾、下左: ボンネット用エンブレム、
下右: ジャンパーのロゴ(すべて当時のもの)

独立採算となって、広告の導入とスポンサーを積極的に勧誘し、社交的な催物を減らして、写真コンテストと本部発行誌「RPS Journal」などの充実を計る。

(現在の Journal は日本のメーカーなどの広告が多く見られ、写真コンテストなども Allen & Overy 社がスポンサーとして全面的に支援しているのは、周知の通り。)

「R P S J / 日本支部設立」

入会直後、在日英国人や関西、九州などに住む日本人から、「本部で貴君の名前を知った。日本支部を作らないか」という話もあったが、いずれもまともなままだち消えてしまった。

1994年夏、日本支部設立の動きが本格化し、青木朗顧問(前理事長)より日本支部設立発起人の依頼を受ける。発起人の一人に、報道責任者会議などでお会いしていた中山信宏氏(当時中部日本放送常務、1年後に死去)の名前を見つけ、設立準備に加わることになった。

カメラ博物館(英国大使館裏)の会議室等で打合せを重ね、支部規約原案を作成した。

約2年近い準備期間を経て、中山太郎元外相を日本理事長に、青木、久保、田村、中山、大野、本村、藤塚氏が役員となり、1996年8月30日、在日英国大使館のVIPレセプションホールにて、ハミルトン英国大使ご夫妻、本部から事務局長も参列し、R P S J が正式に発足した。

このような経緯で、現在に至っている。